

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
2023. 1. 26
No.54 文責 五十嵐

全員で成功することの良さ

前号で、紹介した『成功する「準備」が整う 世界最高の教室』ですが、まだまだ紹介したいところがあるので、見ていただけたら嬉しいです。

本の中で、特に皆さんに紹介したい実践例があります。それは、「風船アクティビティ」です。年度初め、新入生にみんなで輪を作らせ、1人1人に膨らませた風船と削りたての鉛筆を配ります。そこで、教師はこう指示を出します。「今、手にしている風船が1分間割れずに無事なら勝ち。賞品が出ます。」と。この後の展開、想像できますよね？そうです。全員がお互いの風船を割り始めます。大騒ぎしながら。1分間経った後には誰も膨らんだ風船を持っている生徒はいません。ここからがこのアクティビティのおもしろいところです。全員の風船が割れてしまい、誰も勝った人がいないと思う生徒に、教師はこう話します。「勝つためには誰かの風船を割らなきゃいけないとは、言ってないよ。」と。生徒は戸惑いました。「じゃあ、全員の風船が割れなかったら、誰が勝ちになるんですか？」と問いました。教師は「全員だよ。」と答えました。

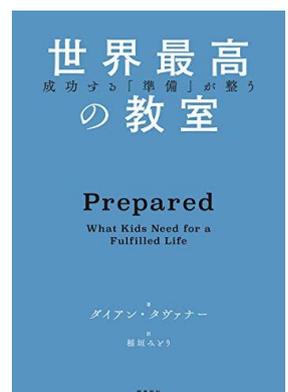
タヴァナー先生は本の中で、「みんなが成功し、その過程でほかの人が成功するのを、互いに助け合っている。」と書いています。この言葉に私は感銘を受けました。

“それぞれが違う長期的なゴールや道、スキルやニーズを持っている人たちが集まったコミュニティで、成功の姿も人によって違い、他人を犠牲にすることもない。”

第7章 「競争力」ではなく「協力するスキル」を より引用

前号で紹介した PBL（問題解決型学習）は、まさにこれを実現させています。その中のプロジェクトに、「シムシティ」というものがあります。最高学年の生徒たちが取り組むプロジェクトです。「持続可能な都市を計画するには？」などの質問を教師が生徒に投げかけ、生徒はチームになり2カ月間作業をします。裏面に、このシムシティのプロジェクトに取り組んでいるところに、外部の方が見学に来た時の場面を書いたページを載せています。

自分の得意な分野を担当し、チーム内でそれぞれが研究したことを共有、そして、学び合って大きなゴールに向けて協力し合う。風船アクティビティは、この学びを簡潔に表していると言えます。みんなで協力して、みんなで成功する。その良さを伝えています。



私は教室のドアを開けて言った。
「さあ、どうぞ。どんな様子か見てみましょう」

自分の強みを知り、仲間と補完し合うスキル

各グループが、都市のモデルを用意していた。建築事務所のウィンドウに飾られているような模型をつくったグループもある。コンピュータ上で作成されたものもある。どのビルも道路も建造物も、植物までも目的を持っている。私がつひつ質問をしてまわると、子どもたちからは考え抜かれた返事が返ってきた。

「ルーフガーデンで、数百ガロンの水を生み出します。汚染もしません」とアンドレア。

「え、ちよつと待つて」見学者のひとりが言った。

「どういう仕組みになっているの？ あと汚染をしないというのは、どういうこと？」

「エコシステムになっているんですよ。生物も無生物も、すべてシステムの一部として使われます。互いを通じて循環しているんです」

アンドレアのグループでさらに話を聞いていると、環境に関する質問には彼女が答え、人口統計学については別の生徒が、数学的な質問にはまた別の生徒が答えているのに気づいた。それについてもどうしてなのか、私は質問した。

「学ぶことが多かったので、」アンドレアは言った。「それぞれに専門分野を決めたんです。それからみんなの知識を持ち寄って、判断をしました」

「誰がどの専門になるかは、どうやって決めたの？」私は質問を重ねる。

チームメイトのひとりマイケルが、**それぞれに自分の強みと興味に合致する分野を選んだのだと、説明してくれた。**自分もつと強化すべきだと感じている分野を彼らは積極的にオープンにして、ペアを組むのも意識的に行っていた。

「ぼくは数学モデリングが得意です」マイケルは言った。

「それでカルロスと組んでいます。カルロスにとっては、それが伸ばしたい分野なんです。でも彼は遺伝子組みかえの食べ物に関してはとても詳しくて、2年生のときのパッション・プロジェクトのテーマもそれでした」

「パッション（情熱）・プロジェクト」とは、サミットで2年生が取り組むことになっているものだ。生徒は自分で選んだ分野を、深く掘り下げて研究する。

「だから……」マイケルは続けた。「カルロスは食糧資源と農業を主導しました」

「よい判断をするためには、お互いに学び合わなくてはなりません」アンドレアが言った。

「だから自分の専門分野については徹底して学びました。そうでないと、他のメンバーに教えられませんでしたから」

「そうだ」マイケルが急に言った。

「みなさん、来週のプレゼンの準備を手伝っていただけませんか？ 質問や反論をしてもらえると助かります。都市計画の担当者たちの反対意見を想定して準備しておかないといけないので」

優秀なのは、偶然じゃない

最終的に見学者たちを教室の外に案内したときに、最初の反応は想像がついた。いつも同じだからだ。そして予想通り、外に出て教室のドアが閉まらないうちに、見学者のひとりが言った。

「いまのはとくに優秀な子たちなんですよね？ びっくりしました」

私は同学年の生徒全員が、プロジェクトに取り組んでいることを説明した。サミットに入ったときにどんな技術や習慣をもっていたかにかかわらず、全員だ。優秀なのは、偶然ではない。年数をかけて子どもたちが一生懸命学び、教師たちが慎重に計画し、連携してきた成果だ。

サミットで起こることは、スポーツ映画のモンタージュのようだと思っっている。

初めは、チームは何らかの理由で勝てない。だが、情熱と目標は持っている。どこかの時点で何かが変わり、選手たちが努力する様子が映し出される。数分だが、実際は何カ月も経っている設定だ。コート際まわに立つて選手を励まし続け